

ヒトとつながるカヤツリグサ科植物
 —ハマスゲ：最悪の雑草で優れた薬草，
 水田雑草の地方名の基にも—

元（公財）日本植物調節剤研究協会
 技術顧問

森田 弘彦

LeRoy G. Holm 博士らは、雑草の性質や知識を世界に向けて発信した著書「The World's Worst Weeds. Distribution and biology 1977」で、カヤツリグサ科のハマスゲ *Cyperus rotundus* L. (図-1) を、悪さの上位18種の筆頭、つまり「世界で最悪の雑草」に挙げた。彼らは、「ハマスゲに関して700以上の論文が書かれ・・・、それらの1/3はこの種を強害または基本的な雑草種に挙げた。」ことをその根拠とした。Holm 博士らは次の著作「A Geographical Atlas of World Weeds 1979」で、雑草を国・地域を単位として種ごとに、S: 最害を及ぼす雑草、P: 基本的な雑草、C: 一般的な雑草、X: 雑草性を有するもの、およびF: フローラ(植物誌に記載される)に区分して記載した。ここでハマスゲは124国・地域の中で、S:52・P:18・C:4・X:17・F:0とされ、日本はSに含まれた。

日本では、京都大学農学部雑草学研究室を創設された植木邦和先生が、ハマスゲを集中的に研究され、その成果をもとに「雑草防除大要 1972」の「2. 耕地雑草の種類 (1) 世界の雑草」の部分で「わが国でも西日本の普通畑、桑園や果樹園など壤土もしくは砂壤土のあまり耕耘を行わない場所や海岸地帯に局所的に多発している。」として、ハマスゲの雑草としての特性を記述された。植木先生は一連の研究の中で、多様な温度で塊茎を処理したところ、-5℃・約2時間の処理で萌芽能力を失うことを認め、「日最低気温の月平均値が-5℃の地域をプロットすると、(中略)、岐阜県高山を含



図-2 本邦におけるハマスゲの分布と温度限界(「植木・中村・小野 雑草研究4:61-67, 1965」から引用)



図-3 根茎が塊茎を貫く点に特徴のあるハマスゲ(エジプト・ナイルデルタにて筆者原図)

めた長野、山梨、福島、新潟県北部および東北地方以北となる。一方、各地に依頼してハマスゲの分布状況を調査した結果、その分布北限は、上記の-5℃の線とほぼ一致している。」とされた(植木ら 雑草研究4, 1965 図-2)。ハマスゲの分布を温度条件から整理されたのは植木先生の卓見であったが、近年の植物誌やWeb情報によると、図-2の「発生なし」のうち、新潟県(新潟市)、山梨県、福島県ではハマスゲが知られている。これも温暖化の影響であろうか。

筆者はハマスゲを研究対象にした経験を持たないが、国際協力事業団の「エジプト稲作機械化プロジェクト」に短期専門家として滞在した1988年の冬に、ナイルデルタのイネ収穫後の圃場でカヤツリグサ属雑草を観察したことがある。夏季に間断灌漑で湛水されるイネ圃場の内部には、茎基部が肥大するものの塊茎にならない *C. longus* L. が生育していたが、ハマスゲは農道などイネ圃場の外に普通に見られたので、識別の要点となる塊茎と根茎の状態を図にした(図-3)。*C. longus* は1980年代前半に東京都に帰化してセイタカハマスゲの和名を与えられた。

ハマスゲの塊茎は世界の広い地域で薬用にされた。例えば、「印度薬用植物誌(Kirtikar・Basuほか Indian Medicinal Plants) 1918」には次の記載がある。

Uses: Roots are used medicinally as a diaphoretic and astringent. Stimulant and diuretic properties are also attributed to them. They are further described as vermifuge. In native practice they are held in great esteem as a cure for disorders of the stomach and irritation of the

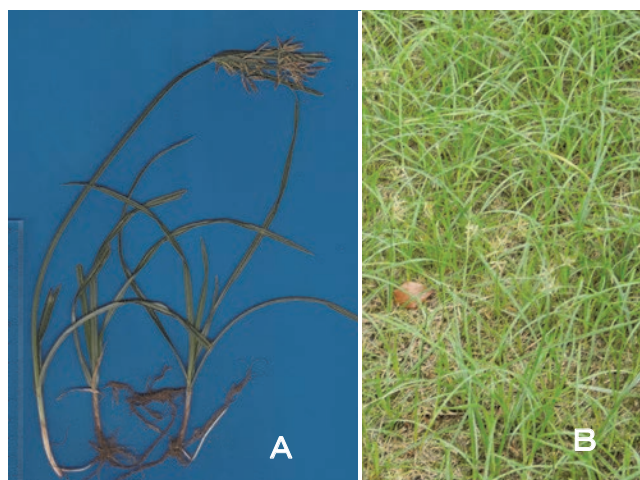


図-1 ハマスゲの形態(A: 茨城県土浦市産)と花期の生態(B: 東京都千代田区日比谷公園)



図-4 「莎草香附子」の図：A：「本草綱目」（「本草綱目 圖 卷上」1672より）、B：「本草圖譜」（岡田清福模写版 1903より）



図-5 元禄年間に刊行された懐中版の「圖考本草和解」の表紙と香附子のページ



図-6 湛水された水田に生育するハマスゲの生物型（円内：フィリピンルソン島北部）

bowels. The bulbous roots are scraped and pounded with green ginger, and in this form, mixed with honey, they are given in case of dysentery in doses of about a scruple. (後略)

また、中東のイラクでは以下の記載がある（「Townsend & Guest FLORA OF IRAQ 8, 1985」）。

Arab and Persian writers have prescribed the drug in febrile and dyspeptic affections and large doses as anthelmintic. They are also applied to ulcers and used as an ingredient of warm plasters.

なじみの薄い医学用語を拾うと、下痢止め・収斂・興奮・利尿・駆虫・婦人用・解熱・健胃・潰瘍など広範囲の薬に使われたとのことである。

東洋では、中国で発達した本草学の中で「香附子」の名で扱われ、17世紀初頭に渡来した李時珍の「本草綱目1596」で詳しく解説されたので、江戸時代には庶民にも知られていたようだ（図-4A）。岩崎灌園の「本草圖譜 芳草部五」には「本草綱目」よりはるかに正確な図（1936 模写版）と以下の解説がある（図-4B）。

莎草香附子 はますげ 本草和名
海邊或ハ田野にもあり宿根より生じ苗葉かやつりぐさに似たり高さ七八寸夏月穂を生ず形莞に似て瘠小 紫黄色の碎花あり根ハ三稜に似て細長黄赤皮あり肉淡褐色堅實にして香氣あり（後略）

17世紀末に出版されたポケット版の本草書「圖考 本草和解（図-5）」では次のように、大阪産と京都産で品質に違いがあるが種は同じと論じている。

香附子 カウブシ
二八月ニトリ陰乾シシテ白ニテ搗シロメ皮ト毛トヲ去リテ炒用ユ鐵ヲ忌皮毛ヲ去テ打碎キテ香附米ト名ツク（中略）・・・薬舗ニ二種アリ摂州大坂にニテ搗碎キ出スハ色赤シテ悪シ京西陣ニテ搗碎キ出スハ色白シテ良シ安居院香附子トイフ大坂の色赤ハ草ノ違タルニハ非ズ乾シマ（ヤ？）ウノ悪キ也掘出シテ能日ニ乾ストキハ中白ク少シ乾トキハ内クミテ赤クナルナリ（後略）

灌園は「はますげ」の名を「本草和名」から引用したが、10世紀初頭の成立とされる「本草和名」での「莎草の根：

香附子」の和名は「美久利」なので、彼の思い違いであろう。江戸時代で最も著名な本草学者、小野蘭山は「・・・故に根なきものを莎草とし、カヤツリグサと訓じ、根あるものを香附子とし、ハマスゲと訓すべし・・・（重訂 本草綱目啓蒙 1847）」と教えていることを考慮すると、ハマスゲの名は江戸時代にできたものと思う。

高度経済成長期頃までは「コウブシ」の利用が普通であったようで、「鹿児島民俗植物記（内藤喬 1964）」には以下の例がある。

※祛痰薬、喘息、子宮病、気管支カタル等に根を煎服。食前三十分に分服する。無月経、月経不順にも根を煎服する。癩気で量明する人はコブシ末を白湯で服用すると即効ある由（鹿児島県隼人町）。

※病後の強壯剤として球を用いる。その時朝鮮人参、イルカの尾、ネムノキの皮を入れて煮る。（長崎県五島福江島）。

近年、生薬や漢方薬の材料として薬用植物の栽培が見直されつつあるが、ハマスゲの再登場はあるのだろうか？

1980年代に全国の農業改良普及所（当時）から集約された水田雑草の地方名の中に「コウブシ」系のものがあり、クログワイにタコボオシ（山口県）やタブシ（新潟県）、ミズガヤツリにタコブシ（千葉県）、ミズコブシ（大分県）やコボシ（鹿児島県）があった（芝山・森田 1994）。いうまでもなく、「タコボオシ」は「蛸帽子」や「凧星」ではなく「田・香附子」で、クログワイやミズガヤツリよりコウブシの名の方をよく記憶していた人々の存在を伝えている。

一方、東南アジアなどではハマスゲが水田にも発生・生育することが知られていて、植木先生も前掲書（植木・松中 1972）に「また、近年南方では水田にも侵入してきており、著者はフィリピンでこの事実をみとめている。」と書かれた。筆者は、1995年につくば市で開催されたシンポジウムにおけるタイの先生の講演でこのことを聞き、また、2008年に国際協力機構の短期専門家として訪れたフィリピンで、水田に生育するハマスゲを観察する機会を得た（図-6）。

耐湿性を獲得したハマスゲの生物型は、本物の「田・香附子」といえる。水田の管理方法が多様化してきた日本の水田でも、いずれ耐湿性ハマスゲが生育するようになるかもしれない。その時には、クログワイやミズガヤツリへの「タコボウシ」の呼称には何らかの変化が生じるのであろうか。